

翁

金子敬一郎 三番叟 三宅近成 千歳 高澤祐介 脇鼓 田邊恭資 大鼓 大倉慶乃助
頭取 鶴澤洋太郎 笛 栗林祐輔 脇鼓 古賀裕己

後見 高林白牛口二 粟谷尚生 佐藤章雄
佐々木宗生 地謡 友枝真也 中村邦生
栗谷充雄 塩津哲生
塩津圭介 長島 茂

狂言

末広がり

シテ 三宅右矩 アド 前田晃一
アド 三宅右近

休憩 二十分

能

西王母

シテツレ谷 友矩 大鼓 亀井 実 太鼓 金春國和
シテ谷 大作 小鼓 住駒充彦 笛 寺井久八郎
ワキ宝生欣哉
ワキツレ 館田善博
ワキツレ 野口琢弘
アイ金田弘明

後見 粟谷辰三 佐藤 陽 高林呻二
金子匡一 地謡 佐々木多門 栗谷能夫
内田成信 友枝昭世
塩津圭介 栗谷明生

休憩 十分

仕舞

高砂

友枝昭世 地謡 佐々木多門
栗谷明生
栗谷能夫
友枝雄人

能

山姥

シテツレ 佐藤寛泰 大鼓 柿原弘和 太鼓 吉谷 潔
シテ狩野了一 小鼓 幸 信吾 笛 一噌隆之
ワキ大日方 寛
ワキツレ 則久英志
ワキツレ 野口能弘
アイ高澤祐介

後見 内田安信 粟谷尚生 友枝雄人
笠井 陸 地謡 大島輝久 出雲康雅
栗谷浩之 香川靖嗣
佐藤 陽 大村 定

附祝言

(終了予定五時頃)

翁(おきな)

「翁は能にして能にあらず」と言われ、他曲とは別格に扱われ、形式が全く異なり天下泰平、国土安穩、五穀豊穡を祈る神事として演じられ、戯曲的な構成はない。初めに(翁渡り)といひ、千歳、翁三番叟につづき、素襖、侍烏帽子の最高礼装の囃子方、後見、地謡方の順に出て、三番叟以下は橋掛かりで待ち、正面での翁の一礼の後、一同所定の位置につき、演奏が始まる。まず、三挺の小鼓が打ち出し、翁の謡出しにつづき、千歳が舞いを始める。その舞の間にシテの翁は白式尉の面(切顎という顎のところで二つに分かれ、飾眉を貼り付けた他にない特色です、また目をへる字にくりぬき笑みと福顔をたたえている)をつけ終わり、荘重な翁の舞となる。舞終わると面をとり、礼をして退場する。これを(翁帰り)という。この後三番叟の舞となり、始めに面をつけず、掛声を掛けながら舞う(揉の段)を舞う。その後黒式尉という面をつけて鈴を振りながら舞う(鈴の段)の舞の後、面と鈴を置き退場し、演奏がおわる。

末広がり(すえひろがり)

ある果報者(富豪)が祝宴の来客への進物用に末広がり(扇の一種、中啓のこと)を買い求める為、太郎冠者を都へ使いにだした。末広がり(何なのか知らない太郎冠者が「末広がり買おう」と都大路を呼び歩いてると、都の売り手(詐欺師・すっぱ)に呼び止められる。太郎冠者を田舎者と見た売り手は、言葉巧みに太郎冠者をだまし、傘を末広がりとして売らせつける。高い値で傘を買って帰った太郎冠者は主人に厳しく叱責されるが、売り手が主人の機嫌が悪い時に囃せといって教えてくれた囃子物を思い出し、「傘をさすなる春日山……」と拍子面白く舞を舞う。怒っていた主人の機嫌もしだいに直り、ついに浮かれだして、主従仲良く謡って囃し回る。

西王母(せいおうぼ)

周の穆王の時代、一人の女が三千年に一度だけ花が咲き実を結ぶ仙桃の花を帝王に捧げる。帝王は、西王母の園の桃花かと問うが、女はそれに答えず帝王の威光を言祝ぐ。帝王が不審に思つて尋ねると、女は西王母の分身であると答え、ひとまず仙界に帰り桃の実も捧げようと言つて天に上る。(中入)帝王が管絃を奏して待つところに、西王母が真の姿を現し桃の実を捧げ舞を舞い、喜びの酒宴に花も人も酔ううちに西王母は天上へと帰って行く。

山姥(やまんば)

山姥の山巡りする有様を謡う百魔山姥と呼ばれる遊女が、信濃国善光寺へ参詣のために従者ととも都から越後国の境川に着く。従者は境川の里人に善光寺の参道を探ねて、上道、下道、上路越の三つのうち、険しい上路越を選ぶ。山に登ると日が暮れる時間ではないのに、にわかには暮れ夜になる。そこに里女が現れて、山中の自分の庵に案内をする。一行が庵に到着すると、里女は自分が山姥であると明かし、山姥の曲舞を謡うように所望してくる。遊女が謡おうとすると、月の出る頃に真の姿を現して舞を舞うといつて姿を消す。(中入)やがて夜になると鹿背杖をつきながら異様な姿の山姥が現れ曲舞の謡に合わせて舞を舞い、本当の山廻りの様を見せ、山から山へと巡つて姿を消すのであった。